神戸大学　大学教育研究センター　大学教育研究
第 9 号 (2000年度)　2001年 3月発行：1-29

生活時間調査からみた大学生の生活と意識
－3大学調査から－

岩田弘三（武蔵野女子大学助教授）
北條英勝（武蔵野女子大学講師）
浜島幸司（上智大学大学院）

生活時間調査からみた大学生の生活と意識－３大学調査から－

岩田弘三（武蔵野女子大学助教授）
北條英勝（武蔵野女子大学講師）
浜島幸司（上智大学大学院）

１．はじめに

われわれはこれまで、在学生および卒業生への意識調査を中心にして、いくつかの観点から学生文化の実態について分析を進めてきた。そして、たとえば大学別にみた場合、どのようなタイプの大学で、いかなる学生文化が根付いているのかなどについて、明らかにしてきた[1]。しかし、意識調査だけからでは、現在の大学生が各学生活動にどのような志向性をもつかまでは明らかにできるとしても、それら活動が彼らの生活のなかで、どの程度の規模の活動として定着しているのか、その実態を正確に把握することは難しいことに気づかせられた。

たとえば 1997 年に 19 大学を対象として行った調査では、学生生活のなかで「学業・勉強」を重視していると応えた学生の比率は、47.7 %であった。しかし、残り 56.1 %の学生たちにとっても、大学での正規の授業を含めれば、彼らの１日の生活のなかでもっとも時間的比重の高い活動は、勉強になっているはずである。つまり、たしかに「学生下位文化」といった視点からみれば、上の調査結果などをもとに「学業志向派」と「学業非志向派」という２つのタイプの学生集団が抽出されることになる。けれども、かりにそうだとしても、むしろ学生以外の人たちとの相違を強調する観点に立ち、学生一般に共通してみられる固有の「学生文化」を問題にした場合には、学生たちは「学業志向文化」を共有していることになる。言い換えれば、学生たちにとってあまりにも当然の、日常的活動（ルーチン）となっているがゆえに、「学生下位文化」のなかでは、過小評価されてしまう活動があることになる。この意味で、「学生下位文化」に焦点を当てた分析から導き出される学生文化の分類は、あくまで他の活動との比較を根拠とする、相対的な活動分類に過ぎず、そこでは絶対量は問題にされていないことが分かる。

ここでは、もっとも分かりやすい例として、学業を取り上げたが、同じことは他の活動についてもいえる可能性がある。たとえば、「学生下位文化」の２つの様態として、「学業志向」と「ファンカルチャー志向（遊び志向）」という軸が抽出されたとしても、「学業志向派」の学生がまったく遊びに精力を注いでいないとは考えにくい。だとすれば、「学業志向」の学生と「ファンカルチャー志向」の学生を分ける分類の分岐点は、すべての学生が共通して遊びに割く精力のプラスアルファー（$+\alpha$）部分にあるといえる。しかも、すべての学生が共通して遊びに割く精力の方が、そのプラスアルファー部分より、絶対的な規模では大きい可能性さえある。しかし、「学生下位文化」の析出だけに比重をかければ、絶対的な規模としては重要な意味をもつ、その共通部分が捨象されてしまう虞が存在する。それゆえ、たとえば今日の大学のレジャーランド化現象を考える場合に、「ファンカルチャー志向」の学生の人数的肥大という問題よりも、現在「学業志向」に分類される学生の本体にさえ、すべての大学生に共通する「学生文化」気質として「ファンカルチャー志向」が大々的に浸透していることの方が、あるいは大きな問題の提起につながる可能性さえ存在するのである。

こうしてみると、とくに現在の大学が抱えるさまざまな問題を考える場合には、相対的な「学生下位文化」のあり様を記述する視点のみならず、各学生活動の絶対的な規模を計測できるような指標を基準にした「学生

文化」のあり方を素描する作業が不可欠だと思われる。そして、その手段として今回は、学生の生活時間の使い方に着目し、意識調査というよりは、事実調査に近い形態での調査を行うことにした。もちろん、生活時間からみた学生のライフスタイルを明らかにすることは、大学の個性化・自由化を基盤にすえた大学改革が叫ばれる時代にあって、各大学がさまざまな活動を推進していく場合の貴重な資料になるとも思われる。

以上のような問題関心を下敷きにして、今回はとりあえず学生生活調査を主軸に据えた基本的な集計結果を報告していきたい。この研究では、特定の1週間をとり平日のなかで、もっとも授業を受講している日と、もっとも授業を受講していない日の、2つの日について学生の1日の時間の使い方を調査した。そこで、まず第2章では、その概要を報告したい。引き続き、第3・4章では、生活時間以外の項目も取り入れて、現在重視している活動、時間的余裕があれば促進してみたい活動をとくに中心として、生活時間との関連などを明らかにしていく予定である。

1．1　調査の概要

今回の調査は、基本的には文科系学部所属の学生を中心に据え、3つ大学について同じアンケート調査を行うという形で実施した。それら大学の簡単なプロフィール、およびサンプルの学年、性別構成等は、表1－1に示したとおりである。

表1－1．調査対象校のプロフィール

	F大学	J大学	T大学	全体
教育年数	4年制	4年制	4年制	
設置主体	私立	私立	私立	
所在地	東京	東京	東京	
入学難易度	5	3	2	
学生総数（人）	10156	3359	2332	
教員一人当たりの学生数（人）	22.3	29.2	37.0	
サンプル数（人）	105[1]	155[2]	156	416
内訳				
男子学生（人）	25	61	0	86
女子学生（人）	79	93	156	328
1年生（人）	3	78	60	141
2年生（人）	57	47	78	182
3年生（人）	29	20	18	67
4年生（人）	12	10	0	22

表注）入学難易度：　5＝65以上、　4＝64～60、　3＝59～55、　2＝54～50、　1＝49以下
（代々木ゼミナール調べ、1999年）。
総学生数、教員一人当たり学生数は、『大学ランキング 2000年版』、朝日新聞社、1999年による。
1）性別不明者1名、学年不明者4名を含む。
2）性別不明者1名を含む。

調査は、1999年12月上旬の一週間について、学生たちに生活時間の使い方を答えてもらうという形式で行った。この時期を選んだのは、一つには、1年生を含めて分析する場合には、まだ大学生活に慣れていないと考えられる、入学間もない時期を避けた方が、有効と判断したためである。第2に、夏休み・冬休みなどの長期休暇を挟んだ前後の時期には、学生たちの生活が幾分不規則になる可能性がある。これらの事情を考慮すると、11月～12月初旬の時期に調査を行うのが最適と考えた。それが、この時期を選んだ理由である。

質問票の内容は、基本的には2つの項目に分けられる。一つが学生の生活時間を直接聞いたもので、もう一つ

がそれと関連して学生生活一般についての意識を調べた項目である。なお、生活時間に関する質問は、起床、家を出た時間、大学に着いた時間、帰校時間、宅帰時間、就寝時間などはその時刻を、その間に行った活動についてはそれに費やした時間の長さを中心に聞いている。

注)

1) たとえば、以下の文献参照。

①武内清「学生文化の規定要因に関する実証的研究」、『大学論集』第 29 集、1999 年、広島大学・大学教育研究センター。

②拙稿「学生文化形成についての大学間比較に関する研究」、『大学教育研究』第 7 号、1999 年、神戸大学・大学教育研究センター。

③拙稿「大学卒業生の学生生活評価と大学評価」、『大学教育研究』第 8 号、2000 年、神戸大学・大学教育研究センター。

(岩田　弘三)

2. 学生の 1 日の生活時間

本章では、学生が 1 日の生活時間をどのように過ごしているのかについて概観する。概観するにあたり、1 日の生活時間を学生が過ごす場所を単位として捉え、学生がそれぞれの場所でどのような時間を過ごしているのかをみていく。そこで、学生の過ごす場所を 3 つに設定したい。1 つ目は、家での場面として「家庭」。2 つ目は、学業・学内生活の場面としての「大学」。3 つ目は、その両者の中間的場面(「大学」への通学・「家庭」生活においての必要品の調達)、およびその活動自体が独立をもしている場面(アルバイトや交友活動など)としての「学外」。この 3 つの場所からの学生生活時間の実態をみていくこととする。

これら 3 つの場所で学生がどのような時間を過ごしているのかをみることは、学生が 1 日の生活―大学生活全体―の比重をどこに置いているのかを多角的に分析するヒントを提示するものと考える。

2. 1. 一日全体の時間配分

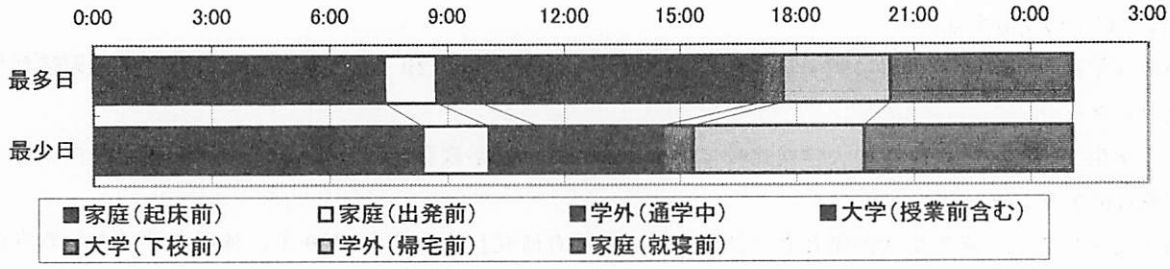
本題に入る前に、本調査の結果示された「最も平均的な時間」配分を簡単にみておく。

図 2 − 1 は、平日についてみた場合、大学の授業が最も多い日(以下「最多日」と呼ぶ)と授業が最も少ない日(以下「最少日」と呼ぶ)とで、各活動の所用時間の平均値を積み上げ、グラフ化したものである。なお図の上部には、このグラフ作成のもとになった数字を掲げておいた。同様に図 2 − 2 は「最多日」について、図 2 − 3 は「最少日」についてのそれぞれの活動時刻を大学別にみたものである。また、表 2 − 4 は、「家庭」、「大学」、「学外」での平均活動時間の合計値を示している。詳細は以下の各節でみていくとして、まずは「最多日」と「最少日」との比較をしてみたい。

表 2 − 4 によると、当然のことながら「最多日」は「大学」での時間配分が 7 時間 48 分と、「最少日」の 4 時間 01 分よりも、3 時間 47 分ほど多くなっていることがわかる。一方、「学外」と「家庭」との合計値をみると、「最多日」で 16 時間 12 分、「最少日」で 19 時間 59 分と、「最少日」の方が 3 時間 47 分ほど「大学」以外で過ごす時間が多くなっていることがわかる。つまり、授業時間が少ないことに伴って発生する自由時間は、ほぼそのまま「家庭」や「学外」での活動時間にあてられている様子がうかがえる。

図２－１．平日の授業日別の各活動平均時刻

	起床時刻	出発時刻	大学到着時刻	授業開始時刻	授業終了時刻	大学下校時刻	帰宅時刻	就寝時刻
最多日	7 時 24 分	8 時 43 分	9 時 51 分	10 時 02 分	17 時 06 分	17 時 39 分	20 時 24 分	25 時 04 分
最少日	8 時 22 分	10 時 03 分	11 時 19 分	11 時 37 分	14 時 32 分	15 時 20 分	19 時 43 分	25 時 03 分



図註；「大学到着時間」～「授業開始時間」は「大学（授業前含む)」に含めた。以下、図２－２、図２－３も同様である。

また、図２－２と図２－３からわかるように、「最多日」、「最少日」の両日とも大学別にみても、全体の平均と同様の配分傾向を示している。しかし、大学による特徴もみてとることができる。たとえば、F 大学の「大学」時間は「最多日」、「最少日」の両日とも、他の 2 大学よりも長い。また一方で、T 大学では「学外」時間に、J 大学では「家庭」にと、それぞれ長く費やしている。このように、大学によって各場面に費やす時間に幾分違いがあることがわかる。

図２－１をみてもわかるように、1 日全体の活動時間は、授業時間の多少によって変化する様子が見受けられる。たとえば、「最少日」に「起床時刻」が遅くなっていたり、「下校後から帰宅まで」の活動時間も長くなっていたりする。しかし、「帰宅時刻」、「就寝時刻」については「最多日」であれ、「最少日」であれ、その時刻に大きな違いがない。

つまり学生たちは、「大学」での授業に合わせて生活時間を変える。逆の言い方をするならば、学生たちの 1 日の生活は大学での授業によって左右されている様子がうかがえるのである。以下、各場所での生活時間の様子を概観しよう。

2．2.「家庭」での生活時間

まずは、1 日の生活時間を追う形で「家庭」、つまり「帰宅後に費やした活動時間」からみてみよう。

先にも触れたが、図２－１のように、1 日の「家庭」での生活をみると、「就寝時刻」が「最多日」で 25 時 04 分、「最少日」で 25 時 03 分と、全く違いがない。これに対し、「起床時刻」は約 1 時間の違いがあり（「最多日」は 7 時 24 分、「最少日」は 8 時 22 分)、「最多日」の方が早起きである。「出発時刻」に違いがみられるのは「起床時刻」に対応するので当然の結果とみられる。だが、その「起床時刻」と「出発時刻」の間の時間に違いがある。「最多日」の方が「出発まで」の所用時間は長い。起床後は身支度を整える、持ち物の確認、食事など、外出の準備にあてられることが多く、あまり多種多様な活動をしている暇はない。すると、朝の時間帯の「家庭」において、起床後の外出準備に関しては「最多日」よりは「最少日」の方が余裕をもっていることがうかがえる。

一方、夕方以降の「家庭」ではどうだろうか。「帰宅時刻」も「最多日」が 20 時 24 分なのに対し、「最少日」は 19 時 43 分と、「最少日」の方が約 50 分早くなっている。「就寝時刻」は同じであることから、帰宅後の「家庭」時間は「最少日」の方が長いことがわかる。

図２－２．大学別「最多日」各活動平均時刻

	起床時刻	出発時刻	大学到着時刻	授業開始時刻	授業終了時刻	大学下校時刻	帰宅時刻	就寝時刻	授業コマ数（平均）
全体	7 時 24 分	8 時 43 分	9 時 51 分	10 時 02 分	17 時 06 分	17 時 39 分	20 時 24 分	25 時 04 分	－
T 大学	7 時 04 分	8 時 11 分	9 時 15 分	9 時 22 分	16 時 41 分	17 時 00 分	20 時 19 分	25 時 02 分	3.8
F 大学	7 時 18 分	8 時 39 分	9 時 46 分	10 時 00 分	16 時 51 分	17 時 53 分	20 時 27 分	25 時 05 分	3.5
J 大学	7 時 48 分	9 時 19 分	10 時 32 分	10 時 44 分	17 時 43 分	18 時 11 分	20 時 28 分	25 時 06 分	3.4

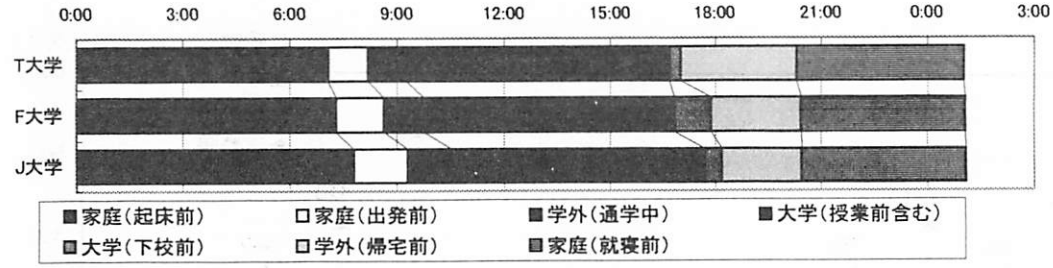


図２－３．大学別「最少日」各活動平均時刻

	起床時刻	出発時刻	大学到着時刻	授業開始時刻	授業終了時刻	大学下校時刻	帰宅時刻	就寝時刻	授業コマ数（平均）
全体	8 時 22 分	10 時 03 分	11 時 19 分	11 時 37 分	14 時 32 分	15 時 20 分	19 時 43 分	25 時 03 分	－
T 大学	8 時 04 分	9 時 30 分	10 時 42 分	10 時 58 分	14 時 10 分	14 時 41 分	19 時 42 分	24 時 53 分	1.9
F 大学	8 時 15 分	9 時 49 分	11 時 13 分	11 時 32 分	14 時 43 分	15 時 55 分	20 時 07 分	25 時 12 分	1.6
J 大学	8 時 47 分	10 時 49 分	12 時 04 分	12 時 24 分	14 時 51 分	15 時 43 分	19 時 27 分	25 時 08 分	1.4

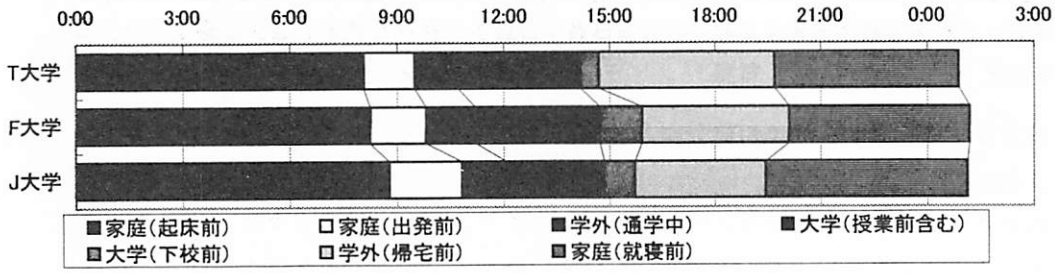


表２－４．大学別にみた３場面の活動時間の合計

	全体		T大学		F大学		J大学	
	最多日	最少日	最多日	最少日	最多日	最少日	最多日	最少日
家庭	12時間19分	14時間20分	11時間52分	13時間48分	12時間12分	13時間42分	12時間51分	15時間22分
大学	7時間48分	4時間01分	7時間45分	3時間59分	8時間07分	4時間42分	7時間39分	3時間39分
学外	3時間53分	5時間39分	4時間23分	6時間13分	3時間41分	5時間36分	3時間30分	4時間59分

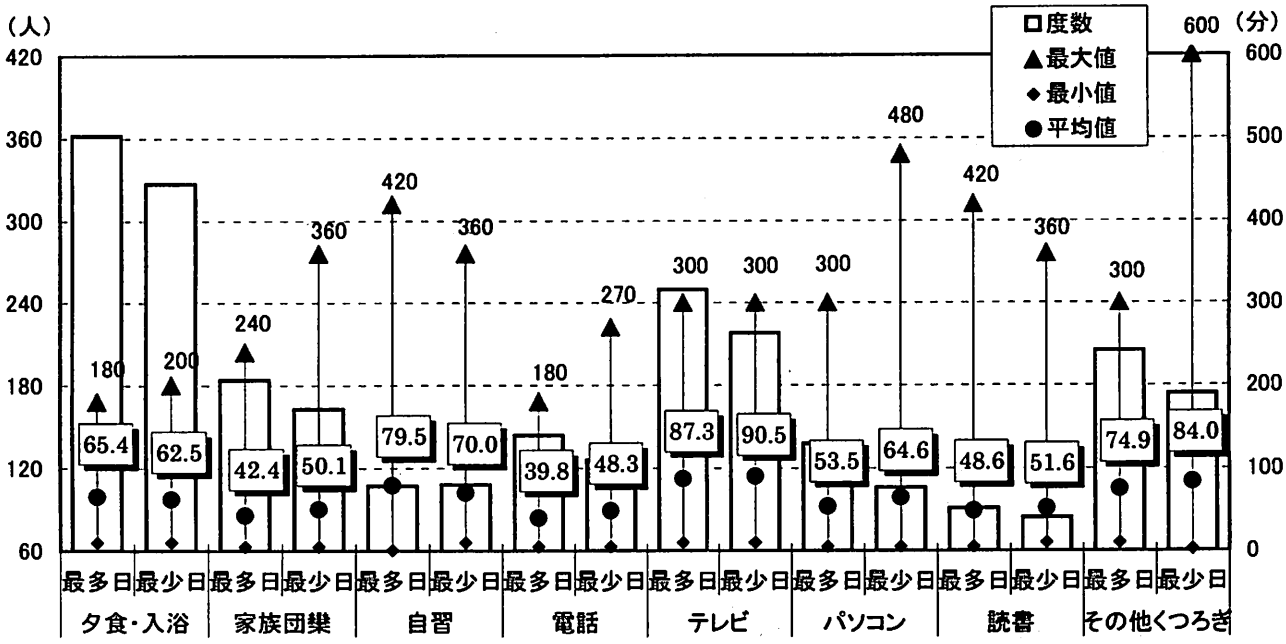
表註　家庭　24時間−（大学＋学外）にて算出
大学　「大学到着時刻～大学下校時刻」の合計
学外　「大学出発時刻～大学到着時刻」「大学下校時刻～帰宅時刻」の合計

図２－４に示された平均値をみると、それぞれの活動時間に関しては、「最多日」も「最少日」もほとんど差がない。帰宅すれば、学生はだいたい同じような生活をしているのである。ただし、費やす時間は各活動で違いがある。平均値の長い活動として、ここで 70 分を超えているものをあげると、「テレビ（視聴）」（「最多日」87.3

分、「最少日」90.5 分)、「その他くつろぎ」(「最多日」74.9 分、「最少日」84.0 分)、「自習」(「最多日」79.5 分、「最少日」70.0 分) である。反対に、「最多日」の「電話」は 39.8 分と「家庭」活動のうちで最も短い。

ここで「家庭」での生活時間の様子をまとめておこう。「家庭」での生活時間を「朝」と「夕方の帰宅以降の時間帯」とあわせて考えると、「最少日」の方が、家庭生活に若干の余裕が感じられる。

図２－４．「家庭」－帰宅後の活動－



図註①；図中の数値は「最大値」と「平均値（囲み数字)」のみ記す。以下、図２－５、図２－６、図２－７、図２－８、図２－９についても同様である。

図註②；これらあまり見慣れない図の見方について触れておこう。図中、棒グラフは１分でも該当する時間があると回答した「人数」を表わしている。棒グラフが高くなればなるほど、回答した「人数」が多いということである。次いで、各項目の上部にある▲（最大値）は回答者の中で最も長い時間回答（分）を表わす。下方にある◆（最低値）は回答者の中で最も短い時間回答（分）を表わす。尚、この◆の最低値は０分ではない。そして、●（平均値）が「回答者」の中での平均時間点を表わす。この３点に注目すると、▲と◆の間が広いほど分散した傾向のある回答といえ、●が平均点として信頼の弱い点と解釈される。逆にこの２点の間隔が狭ければ狭いほど、回答の傾向は似ているものと解釈でき、●（平均値）は平均点として信頼のおける点となる。以下、図２－５、図２－６、図２－７、図２－８、図２－９についても同様である。

2. 3.「大学」での生活時間

それでは、「大学」での生活時間の様子はどうだろうか。表２－４によると、「最多日」の方が「最少日」よりも長く学校にいる。これは明らかに、授業時間のコマ数の違いによるものであると考えられる。しかし、学生たちは授業終了後にすぐ「学外」に繰り出すとは限らない。「授業終了時から大学下校時までの所用時間」に注目してみよう。すると、「最多日」は 33 分なのに対し、「最少日」は 48 分と、その差は 15 分である。中でも F 大学

は、「最多日」、「最少日」の両日とも1時間は授業終了後も「大学」で活動している。「最少日」はやはり授業が少ない分だけ、大学での生活時間にも余裕がうかがえる。

2．3．1．授業の「空き時間」の使い方

学生たちは、授業以外の時間をどのように過ごしているのだろうか。授業の合間などの「空き時間」と「授業終了後の時間」と2つの場合を用意した。それぞれ時間の使い方をみてみよう。

図2－5に示された平均値に注目すると、「友人談話」は「最多日」(70.8分)、「最少日」(64.7分)である。「友人談話」以外の活動では「最少日」の方が「最多日」よりも長い。とくに、「サークル」の「最少日」の平均時間(94.6分)が「最多日」(71.1分)よりも20分以上長くなっている。また、「最少日」の「サークル」活動時間は、「空き時間」活動の中で最も長い。しかし、それぞれの活動参加者数をみると、全て「最多日」＞「最少日」となっている。「空き時間」の活動にあたっては、「最多日」の方が参加活動者数は多い。しかし、活動平均の時間は「最少日」よりも短くなっている。

ここで、大学別に「空き時間」の活動を比較してみよう。サークルへの参加人数は少数であったので、ここでは割愛する。「最少日」の「友人談話」と「自習」の2つの活動を取り出し、これらの平均をみたものが図2－6である。3大学とも「友人談話」に費やす平均時間については大きな差は読み取れない。一番長いのはJ大学の67.4分で、一番短いT大学の59.4分とは8分程度の差である。友人との語らいには、大学間のカラーはないといえる。しかし、「自習」については大学間で開きが認められる。一番長いのはF大学の107.0分である。T大学は55.0分、J大学は48.5分である。F大学学生は「自習」に、T・J大学学生のそれと比べて、およそ2倍の時間を使っている。このように、いくつかの側面では大学による時間配分が異なっているが、「空き時間」の使い方には、大学別に大きな差はみられない。

2．3．2．「授業終了後から下校」までの「大学」時間の使い方

図2－7に示した平均値に注目すると、「読書」は約19分、「最少日」より「最多日」の方が長い。「読書」以外の活動をみると、費やす時間は「最少日」＞「最多日」となっている。「サークル」時間が「最多日」(139.8分)、「最少日」(173.6分)、この両日とも他の活動と比べて、飛び抜けて長くなっている。「友人談話」の時間は両日とも差はないが、他の活動と比べても最も短く、平均値も50分を割っている(「最多日」42.0分、「最少日」49.9分)。他の活動では、「サークル」で約23分、「自習」で約28分「最少日」の方が長い。「最少日」の「授業終了後の時間」には、「サークル」に、「自習」にと、多く時間が使われている。

それぞれの活動参加者数をみると、「友人談話」が「最多日」、「最少日」の両日とも80名を超えており、他の活動と比べても圧倒的に多い。そして、「授業終了後の時間」に「友人談話」をする場合が多いのは、「最多日」の方である。反面、「サークル」や「自習」は、両日とも活動人数に大きな差はみられない。また、この2つの活動時間は、「最多日」より「最少日」の方が長い。一方、「読書」活動時間は「最多日」に長い。この結果を受けていうと、「友人談話」以外の活動について、学生は「授業終了後の時間」にそれぞれさまざまな活動をしているようである。

図２－５．「大学」（授業の「空き時間」活動）

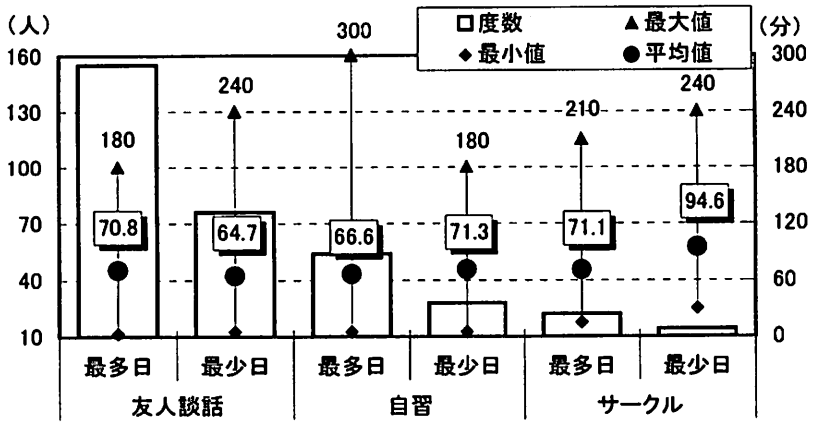


図２－６．大学別「大学」（授業の「空き時間」）活動時間の比較（「最少日」）

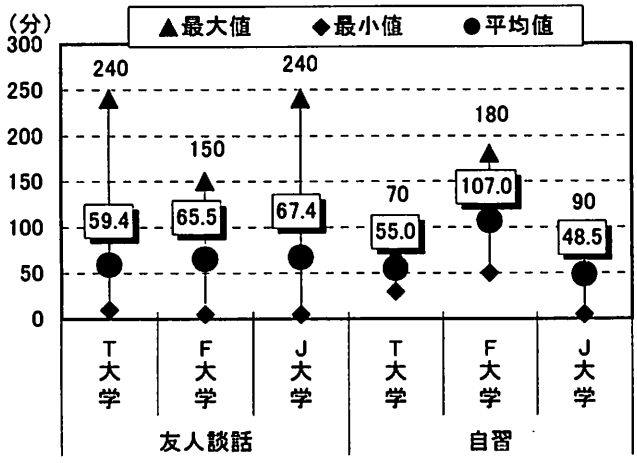
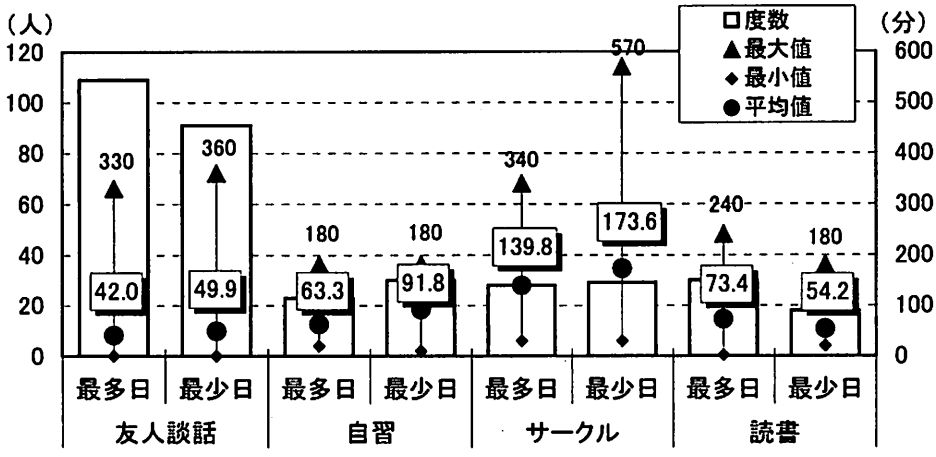


図２－７．「授業終了後の時間」の「大学」での活動



「友人談話」の人数が「最多日」に多い理由として考えられるのはおそらく、①「最多日」ゆえに大学にいる時間が長い、②多くの友人も大学に来ている、それゆえ「授業終了後の時間」も友人と接触する頻度も増えるの

だろう。ただし、「最多日」の「友人談話」の時間は、「サークル」、「読書」、「自習」時間に比べて短い。すると、「友人談話」に時間的な比重は少なく、「大学」で重視する時間を個人の目的に合った活動とし、学生はそこに多く時間を使おうとしている姿を想像することができよう。

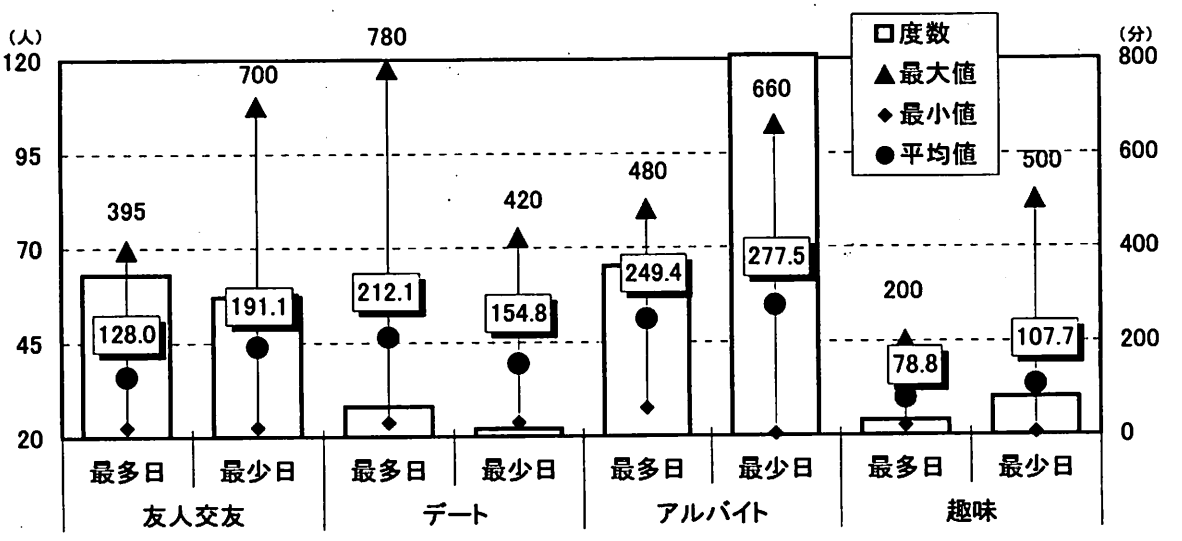
2．4．「学外」での生活時間

それでは、「学外」ではどうだろうか。「家を出てから大学到着まで」が、ほぼ「大学へ行くだけ」になるとするならば、あまり「生活時間」に違いはなく、むしろ明確な違いが出るのは「大学下校から帰宅まで」であると考えられる。ここでは「学外」を「大学下校から帰宅まで」の時間ととらえ、それぞれみていくこととしたい。

表２－４によると、「学外」合計時間の「最多日」は３時間53分なのに対し、「最少日」は５時間39分と１時間46分の違いがある。また、「大学」から「学外」へ出発する時刻に関しては、図２－１によると、「最多日」で17時39分、「最少日」で15時20分と、２時間19分ほど「最少日」の方が早い。

その活動内容をみてみよう。図２－８をみると、「学外」活動は主として「友人交友」と「アルバイト」であることがわかる。平均値に注目すると、「最少日」の「アルバイト」が277.5分と最も長い。「学外」活動時間が３時間を超えるのは、「アルバイト」の他に、「最少日」の「デート」（212.1分）、「最少日」の「友人交友」（191.1分）がある。参加人数では、「アルバイト」、「友人交友」への活動が多い。とくに「最多日」の「アルバイト」人数が121名であり、「最少日」の65名に比べて、圧倒的に多くなっている。

図２－８．「学外」－下校から帰宅までの活動者数と活動時間－



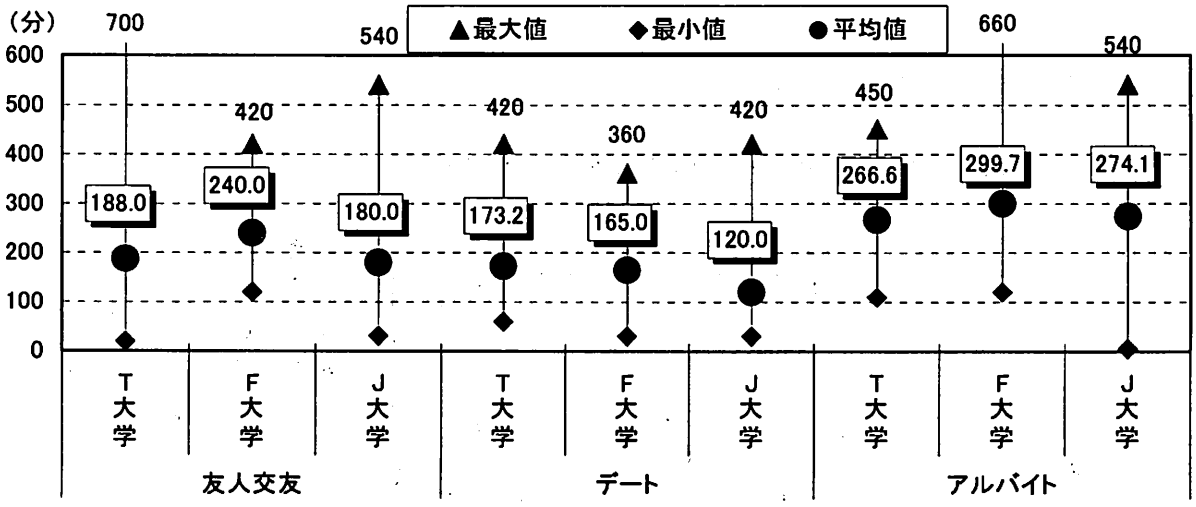
大学の授業日別にそれぞれの活動の平均時間をみていくと、「デート」以外、「最多日」よりも「最少日」の方が平均値は長くなっている。「アルバイト」、「趣味」については、参加人数が「最多日」よりも「最少日」の方が多く、費やす時間も長い（最大値の値も同様）。一方、「友人交友」については、参加人数が「最少日」よりも「最多日」の方が多く、活動時間も長くなっている。「最少日」の活動について、学生は「友人交友」よりも「アルバイト」の方を優先することがわかる。だがしかし、「友人交友」を選択した場合、こちらの活動に時間が長く使われているようである。

「最少日」における、「学外」活動を大学別に比較してみよう。「趣味」については、活動人数が少数であった

ので割愛した。図２－９に示した平均値に注目すると、「友人交友」の時間が最も長いのは F 大学学生（240.0 分）である。ただし、その活動者の割合は F 大学の中でわずか 6.7％と少ない（T 大学は 17.3％、J 大学は 20.7％）。つづいて、「デート」では T 大学学生が最も長い。なお、F 大学での活動者は全て女子である。J 大学女子の平均値は 135.0 分であった。J 大学女子の活動時間は、F 大学女子の活動時間と比べて 30 分短い。この結果から、異性との交際比重は T 大学女子と F 大学女子に強いようだ。また、「アルバイト」時間は 3 大学とも平均値に大差はない。各大学の「アルバイト」活動者の割合も大差ない。T 大学では 34.6％、F 大学では 30.8％、J 大学では 31.5％が、「最少日」の「アルバイト」に参加する。

このように、学生が「学外」活動にどのくらい時間を使うのかについては、授業コマ数の多少によって、その配分時間が左右されることがわかる。しかし全体的にみれば、そこで発生した自由時間を、どれか 1 つの活動に集中させているといった傾向はあらわれない。学生は、「アルバイト」、「友人交友」、「デート」に自由時間を、自分の目的に合わせて使っているのである。

図２－９．大学別（「学外」）活動時間の比較（「最少日」）



２．５．第２章のまとめ

以上の結果から、現代大学生の時間の使い方を主要な活動を中心にまとめておこう。学生の 1 日の各活動に占める平均値をみると、全般的に「学外」活動の時間の長さが特徴的である。中でも、「アルバイト」、「友人交友」、「デート」への配分時間が長い。また、「学内」でも「サークル」活動時間について、「授業終了後の時間」、授業の合間の「空き時間」の両場面において、長く費やす傾向がある。他に、「授業終了後」の「最少日」の「自習」時間（91.8 分）も長い。一方で、「友人談話」は他の諸活動と比べて、平均値は短いものの、参加人数は最も多くなっている。「家庭」では、「テレビ（視聴）」、「その他くつろぎ」、「自習」活動に多く振り分けられる傾向がある。また、「パソコン」を使用する時間は、「読書」、「家族団欒」、「電話」といった各活動時間の平均値よりも、長くなっていることにも注目できる。この結果について、学生の生活にコンピュータが浸透している実情としてとらえると、非常に興味深い。このように、現在の大学生がどの活動に長く時間を使っているのかをみることによって、今後の学生文化研究を進める上で、どこに焦点をあてていったらよいのかが明確になっていくと思われる。

1日全体を通してみていくと、やはり「最少日」の方が「最多日」よりも、授業が少ない分だけ個人の裁量で使える時間があるといえる。この意味で、「最少日」に自由時間があるのは確かである。「最少日」の「大学」での時間は短い。その代わりに、他の時間を「家庭」に、「学外」にと、学生は振り分けている。

全体を通してみると、平均時間を分析してきた結果だからなのだろうか、それぞれの大学によって、独特の時間配分を行っていると結論づけるほどの差異を読み取ることはできない。とはいえ、大学による違いが全くみられなかったわけではないので、いくつか挙げておこう。たとえば、同じ「最多日」であっても、「大学」活動時間の長いF大学、「学外」活動時間の長いT大学、「家庭」活動時間の長いJ大学と、その時間配分は異なる。また、「大学」での活動時間についても、とくに「空き時間」の活動などでは、大学によってその違いもみられる。F大学学生は「自習」に費やす時間が、他2大学の学生と比べて長い。「学外」活動（「最少日」）では、「友人交友」時間の長いF大学、「デート」時間の短いJ大学といった結果があらわれてもいる。このように、学生が在籍する大学によって、「生活時間」に固有の配分パターン（＝学生文化）があることは十分示唆されよう。

（浜島幸司）

3．学生たちが現在重視している活動と自由時間の配分

前章では、現在の大学生たちが平日の授業期間中に、どのような一日を送っているのか、その平均像をみてきた。しかし、とくに自由時間についていえば、学生たちのなかにはアルバイトなどには目もくれず、勉学に打ち込んでいる学生も存在すれば、その逆の学生も存在すると思われる。サークル活動やボランティア活動などについても同様である。けれども平均像だけでは、どのような活動に打ち込んでいるグループが存在し、どの程度、各活動に時間を割いているのかは、当然のことながらみえてこない。また、学生たちが、現在の限られた時間配分のなかで、自分が希望する活動に満足できるだけの十分な時間を確保できているかどうかも分からない。そこで本章では、それらの点を明らかにしていくことを、第一の目的とする。さらに第2章の分析結果はあくまで、平日を対象としたもので、土曜日、日曜日を含めた一週間をとおしての活動状況までは分からない。それを組み込んだ分析を行うことが、本章の第二の目的である。

以上の目的にそくして本章では、具体的にいえば、以下のような視点から分析を進めていくことにする。(1)学生たちは、現在どのような活動を重視して大学生活を送っているのか。また、(2)現在重視している活動で、学生集団をグループ分けした場合、それぞれのグループは実際、1週間をとおしてどのような活動に精をだしているのか。(3)今はさまざまな諸事情で時間がなく、取り組む余裕はないが、もう少し自由になる時間があれば、是非とも積極的に参加してみたいと、学生たちが思っている活動があるとすれば、それはどのような活動なのか。また、(4)時間的余裕があれば促進してみたい活動についていえば、学生たちは本当にそれほど忙しすぎて、それら活動に積極的に参加できないでいるのか。もしそうだとしたら、現在行っているどの活動に多くの時間をとられているのか。などである。

ところで、以上の点については、今回サンプルとした大学の1つを事例にとって、一部の結果を報告している[1)]。そこで本稿では、主に大学間の違いに焦点を当てて考察を進めていくことにした。

3．1．現在重視している活動と、時間的余裕があれば促進したい活動

まず、今回サンプルとした大学生は、どのような活動を中心に据えて、現在の大学生活を送っているのかをみてみよう。今回のアンケート調査では、この点について12の活動領域を取り出し、現在の大学生活のなかで、それら活動をそれぞれ「非常に」、「やや」重視しているのか、「あまり」、「ほとんど」重視していないのかを、4

段階評価で応えてもらった。そこでここでは、たとえば現在、サークルが「大部分」、もしくは「かなり」比重を占めていると応えた学生を「サークル重視派」、サークルは「少し」しか、あるいは「ほとんど」比重を占めていないと応えた学生を「サークル非重視派」と呼ぶことにした。他の活動についても同様である。表３－１の上半分は、各活動ごとに「重視派」に分類された学生の比率を示したものである。最初に、今回のサンプル学生全体の状況をみれば、学生たちが現在の大学生活のなかでもっとも重視している中心的な活動は、「友人との交友」であり、ついで「休養」、「趣味」、「学業・勉強」、「娯楽」、「アルバイト」、「読書」、「異性（恋人）との交際」、「サークル」、「家事」とつづいていることが分かる。また、資格取得などを目指し、大学の授業と並行して専門学校に通う「ダブルスクール」や、「ボランティア」重視派は、ごく少数である[2)]。

表３－１．学生生活のなかで重視している活動と時間的余裕があれば促進したい活動

	大学			
	F大学	J大学	T大学	全体
学業重視	83.8%	62.6%	74.8%	72.4%
読書重視	57.0%	55.8%	39.4%	49.9%
サークル重視	50.5%	35.2%	31.3%	37.4%
アルバイト重視	65.6%	64.7%	64.9%	65.0%
趣味重視	82.4%	83.1%	82.3%	73.9%
交友重視	89.0%	87.7%	91.0%	89.2%
異性重視	51.0%	51.7%	45.4%	49.1%
娯楽重視	55.4%	76.2%	71.4%	69.2%
ボランティア重視	6.2%	7.5%	12.6%	9.1%
ダブルスクール重視	15.1%	8.3%	8.8%	10.1%
家事重視	29.3%	32.0%	40.6%	34.6%
休養重視	66.3%	77.9%	76.8%	74.6%
学業希望	86.9%	70.0%	83.7%	79.4%
読書希望	90.0%	80.0%	76.5%	81.1%
サークル希望	44.3%	35.6%	37.1%	38.3%
アルバイト希望	64.3%	69.7%	73.7%	69.9%
趣味希望	92.9%	93.4%	90.2%	92.1%
交友希望	90.0%	91.3%	92.8%	91.6%
異性活動希望	73.2%	62.6%	62.9%	65.3%
娯楽希望	65.7%	79.9%	82.2%	77.2%
ボランティア希望	30.9%	29.5%	44.4%	35.5%
ダブルスクール希望	33.7%	28.1%	32.9%	31.3%
家事希望	53.6%	54.4%	63.4%	57.6%
休養希望	76.5%	83.3%	89.5%	84.0%

それでは、今回サンプルとした学生たちが、「かりに現在の生活のなかで、いま以上に時間的余裕ができたとすれば、その余分な時間をどのような活動に振り向けたいと思っている」のだろうか。今回のアンケート調査では、以上と同じ 12 項目について、「非常に」、「やや」振り向けたい、振り向ける予定は「あまり」、「まったく」ない、の４段階評価で質問を行った。そこで、時間的余裕があれば、その余裕を特定の活動に「非常に」、「やや」振り向けたいと応えた学生を「○○希望派」、振り向ける予定は「あまり」、「まったく」ないと応えた学生を「○○非希望派」と名付けることにした。表３－１の下半分は、各活動ごとに「希望派」の学生の比率を示したものである。ここでもまず、今回のサンプル学生全体の状況を確かめておけば、学生たちがもっとも促進したいと思って

いる活動は、「趣味」であり、ついで「友人との交友」、「休養」、「読書」、「学業」、「娯楽」、「アルバイト」、「異性との交際」、「家事」、「サークル」、「ボランティア」、「ダブルスクール」の順になる。いずれの活動についても、現在重視している活動と比べると、それら活動を時間的余裕があれば促進したいと感じている学生の比率が高いことが分かる。

表３－１には、大学別の集計結果も載せておいた。そこでつぎに、大学ごとの特徴をみていこう。たとえば、「読書」重視派の学生の比率は、Ｔ大学に比べ、Ｆ大学、Ｊ大学で高いことが分かる。このように表では、いずれか１つの大学の数値が、他の２大学の数値に比べて高いか、低い傾向のみられたものには、高かった数値の方に下線を付けてある。また、「学業」重視派の比率にはＦ大学、Ｔ大学、Ｊ大学といった順に、「趣味」重視派の比率にはＪ大学、Ｔ大学、Ｆ大学といった順に、明らかに傾斜的な大学差が観察され、いずれか１つの大学の数値だけが、他の２大学の数値に比べて極端に高いか、低い傾向がみられるわけではない。このような場合には、表では数値に網掛けを施してある。

まず、Ｔ大学では「学業」重視・希望派は比較的多いが、「読書」重視・希望派はきわめて少ない。一方、Ｊ大学では、「読書」重視・希望派は比較的多いが、「学業」重視・希望派はきわめて少ない。これに対し、Ｆ大学では、「学業」重視・希望派と「読書」重視・希望派に加えて、「ダブルスクール」重視派の比率がきわめて高い。しかも、「趣味」、「娯楽」、「休養」重視・希望派が、他の２大学に比べ概してかなり少ない。同様に、「サークル」重視・希望派の比率が高いのも、Ｆ大学の特徴となっている。この意味でＦ大学は、勉学志向およびサークル志向の強い大学であるとみなせる。ここまでみてきた範囲においては、Ｊ大学とＴ大学は、よく似た大学であるといえる。これら両大学の相違は、Ｔ大学では「家事」や「ボランティア」の重視・希望派が多いのに対し、Ｊ大学では「趣味」重視派が多いことである。なお、Ｔ大学で「家事」重視・希望派が多い理由は、この大学が女子大であるためとも考えられる。そこで、女子学生だけに絞って、各大学ごとの家事重視派の比率を調べてみたところ、Ｔ大学で 40.6%、Ｊ大学で 36.3%、Ｆ大学で 31.1%となった。こうしてみると、Ｔ大学の「家事」志向の大きさは、この大学のサンプルに含まれる女子学生の多さだけでは、説明できない。

３．２．現在重視している活動と実際の時間配分

今回の調査では、(a)主に資格取得のために大学が正規の授業以外に開講しているエクステンション、(b) 専門学校、(c)サークル、(d)ボランティア、(e)アルバイトなどの活動について、平日、土曜日、日曜日に何時間程度の時間を割いているかを聞いている。そこで、現在の生活のなかで、ダブルスクール、サークル、ボランティア、アルバイトなどの「重視派」の学生たちが、「非重視派」の学生たちに比べて、どの程度それら活動に時間を割いているのかをそれぞれ調べてみた。なお、たとえば「サークル重視派」が「サークル非重視派」に比べて、平日・土曜・日曜を含めて、どの程度多くサークル活動に時間を割いているのか、その具体的な数字は、今回サンプルとした大学の１つを例にとって詳しく紹介しており[3)]、大学別にみてもそれと週当たり数時間程度の差しかみられなかったので、ここでは割愛することにして、以下、３つの大学を比較した結果だけ報告しておこう。

まず当然のこととして、どの大学でも、たとえば「サークル重視派」は「サークル非重視派」に比べて、かなり多くの時間をサークル活動に投入していた。ダブルスクール、アルバイト、ボランティアについても同様である。ただし、大学別にみると、Ｆ大学の「サークル重視派」は、他の２大学の「サークル重視派」に比べて、サークル活動に週当たり４～５時間、より多くの時間を割いていることが分かった。同様に、「ダブルスクール重視派」が、専門学校の授業に投入する時間は他大学に比べ、週当たり２～３時間程度、Ｆ大学で大きかった。また、「ボランティア重視派」が、ボランティア活動に費やす時間は他大学に比べ、週当たり２～３時間ほど、Ｔ大学で大きかった。先に、それぞれの活動についての各大学ごとの重視派の比率をみた。その知見と照らし合わせてみると、Ｆ大学ではサークル重視派やダブルスクール重視派の比率が、他大学に比べて高いのみならず、彼らの

それら活動への従事時間も、他大学より週当たり数時間、高いことが分かる。T大学におけるボランティア活動についても、同様のことがいえる。

第2に、学生一般に共通してみられる自由時間の使い方として、今回調査した活動のなかで、アルバイトが最大の日常活動となっていた。学生たちがアルバイトに投入する時間は平均でみると、F大学では、平日5日間で6.8時間、土曜日には1.9時間、日曜日には1.1時間で、週当たり合計9.8時間。J大学では、平日5日間で7.2時間、土曜日には2.7時間、日曜日には2.5時間で、週当たり合計12.4時間。T大学では、平日5日間で7.0時間、土曜日には2.6時間、日曜日には3.1時間で、週当たり合計12.7時間となっている[4]。しかも、「学業」、「読書」、「サークル」、「趣味」、「友人との交友」、「異性との交際」、「娯楽」、「ボランティア」、「ダブルスクール」、「家事」、「休養」のどの活動の重視派も、多少の偏差はみられるものの、各大学ごとに上に示した平均値程度の時間をアルバイトに投入していた。こうしてみると、多くの学生はアルバイトに従事する時間をしっかりと確保しながら、他の活動にも励んでいることが分かる。そして、それに費やす時間の長さからいっても、学生にとってアルバイトは、大学での正規の授業につぐ、大がかりな日常的活動になっていることは明らかである。たとえば、今回の調査では、アルバイト以外に、サークル、ボランティア、エクステンション・専門学校の授業といった項目についても、平日、土曜、日曜に各活動に振り向ける時間の長さを調査しているが、大学別にみるとそれら4つの活動のなかでは、F大学のサークル重視派が、サークルに費やす時間は、自由時間の使い方としては最長で、週当たり11.2時間に達している。しかし、彼らでさえ、週当たり7.9時間をアルバイトに振り向けているのである。

3．3．現在重視している活動と、時間的余裕があれば促進したい活動との関係

それでは、現在重視している活動と、時間的余裕があれば促進したい活動との間には何らかの関係があるのだろうか。表3－2は、現在重視している活動と、時間的余裕があれば促進したい活動との間の相関をみたものである[5]。なお表では、0.4以上の強い相関がみられたものには濃いめの網かけが、0.3～0.4程度の弱い相関がみられたものには薄めの網かけが施してある。表をみれば、0.3以上と明らかに相関がみられる項目として、「読書」、「サークル」、「友人との交友」、「異性との交際」、「娯楽」、「ダブルスクール」、「家事」の7活動については、時間的余裕があれば、現在重視している活動をより促進したいと考えている学生が多いことが分かる。同様に、「学業」、「趣味」、「ボランティア」、「休養」の4活動については、0.3以下の相関しか観察されないにしても、現在重視していない活動よりは、現在重視している活動を、時間的余裕があれば今以上に促進したいと考えている傾向がみてとれる。このような傾向がみられない唯一の活動が「アルバイト」であり、アルバイトを現在重視している学生たちは、時間的余裕があっても必ずしもこの活動をより促進したいとは考えていないことが分かる。

表３－２．現在重視している活動と時間があれば促進したい活動の相関

	学業重視	読書重視	ｻｰｸﾙ重視	ｱﾙﾊﾞｲﾄ重視	趣味重視	交友重視	異性重視	娯楽重視	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ重視	ﾀﾞﾌﾞﾙｽｸｰﾙ重視	家事重視	休養重視
学業希望	0.210	-0.018	0.078	-0.001	-0.010	0.066	0.011	-0.015	0.046	0.023	0.168	-0.030
読書希望	0.102	0.341	-0.022	0.038	0.029	-0.041	-0.059	0.025	0.032	0.031	0.061	0.008
ｻｰｸﾙ希望	0.091	0.024	0.483	0.044	0.015	0.052	0.058	-0.070	0.104	-0.004	-0.035	-0.004
ｱﾙﾊﾞｲﾄ希望	-0.049	0.036	-0.031	0.104	-0.017	0.078	0.045	0.141	0.044	0.032	-0.036	0.086
趣味希望	0.025	0.036	0.004	0.059	0.244	-0.008	-0.055	0.005	0.058	-0.074	0.136	0.058
交友希望	-0.027	-0.056	0.008	0.037	0.082	0.305	0.119	0.090	-0.003	0.004	0.035	0.069
異性活動希望	-0.038	-0.039	0.066	0.163	-0.021	0.128	0.538	0.064	-0.031	-0.003	0.000	0.024
娯楽希望	-0.116	-0.034	-0.118	0.020	0.069	0.108	0.071	0.373	0.028	0.015	0.085	0.175
ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ希望	0.054	-0.007	0.028	0.044	0.088	0.045	0.006	0.093	0.291	0.029	0.084	-0.018
ﾀﾞﾌﾞﾙｽｸｰﾙ希望	0.000	0.018	-0.104	0.001	0.069	0.056	0.062	0.171	0.060	0.371	0.072	0.092
家事希望	0.143	-0.060	0.089	0.043	0.023	0.052	0.011	0.100	0.070	0.006	0.303	0.061
休養希望	-0.033	-0.043	-0.046	0.073	-0.014	0.051	0.031	0.162	0.031	-0.037	0.049	0.199

ここでも、「○○希望派」、「○○非希望派」とに分け、それら２つのグループが現在どの程度の時間を個々の活動に費やしているのかを、それぞれみていくことにしよう。表 3－2 の結果から当然予想されるように、どの大学をとっても基本的には、たとえば「サークル」に現在多くの時間を投入している学生ほど、もっと「サークル」活動に時間を費やしたいという希望派が多かった。「ボランティア」、「ダブルスクール」についても同様である。これに対し、「趣味」、「友人との交友」、「異性との交際」、「娯楽」、「家事」、「休養」希望派は、非希望派に比べて、正規の授業、エクステンション、専門学校、サークル、ボランティアの５活動に費やしている時間の総計をとれば、現在でもそれら５活動に費やす時間総計は少ないことはあっても、多いことはなかった。つまり、これら５活動への取り組みが忙しすぎて、自分が希望する「趣味」などの活動に費やす時間が削られている訳ではなかった[6]。こうしてみると、家庭の事情が絡む可能性のある「家事」については保留するとしても、「趣味」、「友人との交友」、「異性との交際」、「娯楽」、「休養」重視派・希望派の学生は、基本的にはファン・カルチャー志向派であるともみなせる。

一方、Ｔ大学の「学業」、「読書」希望派の学生は非希望派に比べて、平日、土曜日、日曜日合わせて、週当たり 20～40 分程度、ボランティアにより多くの時間をかけている。また、Ｊ大学とＦ大学の「学業」希望派も非希望派と比較すれば、週当たり 10 分程度に過ぎないが、ボランティアにより多くの時間を割いている。このような傾向がみられるボランティア活動を除き、ダブルスクール（エクステンション・専門学校での学習）やサークルといった課外活動に、週当たりどの程度の時間を振り向けているかといった点について、「学業」、「読書」希望派の学生と非希望派の学生の時間の使い方を比較すれば、Ｆ大学とその他２大学のあいだに大きな差異が観察される。Ｊ大学とＴ大学の「学業」、「読書」希望派は非希望派に比べて、サークルやダブルスクールに、１週間をとおして多くの時間を投入しているのに対し、Ｆ大学ではそれとはまったく逆の傾向が確認できるからである。つまり、Ｔ大学とＪ大学では、それら活動に忙殺されている時間をもう少し、学業や読書に振り向けたいと希望している学生が多い。これに対しＦ大学では、サークルやダブルスクールには興味・関心を抱かず、読書や本業である学業に専念したいと思っている学生と、サークルやダブルスクールといった課外活動の方を、学業や読書より重視したいと思っている学生とに、学生集団が二分できると考えられる。

ただし正確にいえば、Ｆ大学の「学業」非希望派は希望派に比べ、サークルに約 0.6 時間、ダブルスクールに 7.7 時間ほど多く時間を投入しているのに対し、「読書」非希望派は希望派に比べ、サークルに 11.3 時間、ダブルスクールに 0.9 時間ほど多く時間を投入している、といった時間配分がみられた。つまりＦ大学では、大学での正規の授業に関連した学習を優先するか、資格取得など就職に直結した教育（ダブルスクール）を優先するかで、学生集団が色分けされているのみならず、サークルを優先させるか、読書を優先させるかでも、学生集団が

色分けされていると考えられる。以上を総合すると、F大学の学生は、(a)大学での正規の授業に関連した学習と読書をともに重視する「勉学志向派」と、(b)課外活動としての学習を重視する「ダブルスクール志向派」、(c)どちらかといえば勉学よりも、サークル活動を重視する「サークル志向派」の学生に三極分化しているともみなせる。

しかし、先にも指摘したように、サークルやダブルスクールに費やす時間は、アルバイトに投入している時間に比べれば微々たるものである。そこで、各活動の「○○希望派」と「○○非希望派」とがそれぞれ、平日、土曜、日曜を合わせてアルバイトにどの程度の時間を投入しているかを、確認してみた。大学別にその結果を要約したものが、表3－3である。たとえば、表では「学業希望」の欄をみると、J大学とT大学については「＋」のマークが入っている。これは、J大学とT大学では、「学業希望派」の方が「非希望派」に比べて、現在の週当たりアルバイト従事時間が多いことを示している。そして、それとは逆の傾向が観察されたF大学については「－」のマークを入れてある。

表3－3．週当たりのアルバイト時間と時間があれば促進したい活動の大学別動向

	学業希望	読書希望	サークル希望	アルバイト希望	趣味希望	交友希望	異性活動希望	娯楽希望	ボランティア希望	ダブルスクール希望	家事希望	休養希望
F大学	－	－	－	＋	＋	－	＋	＋	＋	－	＋	－
J大学	＋	－	－	－	＋	＋	＋	＋	＋	＋	－	＋
T大学	＋	－	－	－	＋	＋	＋	－	＋	＋	－	＋

「趣味」、「友人との交友」、「異性との交際」、「娯楽」、「休養」重視派・希望派の学生は、基本的にはファン・カルチャー志向派である可能性が高いと先に指摘した。これら5活動希望派の学生は非希望派に比べて、いくつかの例外を除いて、基本的にはアルバイト時間数が長い。「ボランティア」希望派についても同様の傾向が観察される。こうしてみると、ボランティア希望派のみならず、これらファン・カルチャー志向派にとってさえ、アルバイトは少々負担になっているとも考えられる。つまり、もう少しペイのよいアルバイトを見つけ、現在のアルバイト時間数を減らして、遊びに時間をかけたいという意識が垣間みえるとも解釈できる。

これに対し、「読書」、「サークル」、「家事」希望派は非希望派に比べて、現在のアルバイト時間が、幾分少ない。この結果は、現在アルバイトに精をだしている学生は、読書、サークル、家事などに関する興味がもともと薄いことを示唆しているとも思われる。

さらに、「アルバイト希望」、「学業希望」、「ダブルスクール希望」の欄をみると、F大学と他の2大学とで、傾向が逆転している。たとえば、「アルバイト希望派」（時間的余裕があれば今以上にアルバイト活動を促進したいと希望している学生）の、現時点でのアルバイト従事時間はJ大学で11.6時間、T大学で11.5時間であった。それに対し、「アルバイト非希望派」（時間的余裕ができてもこれ以上アルバイト活動を促進したいとは希望しない学生）の、現時点でのアルバイト従事時間は、J大学で13.2時間、T大学で15.6時間であった。このように、これら2つの大学では、アルバイト非希望派の方が希望派に比べて、現在のアルバイト従事時間が長い。逆の見方をするなら、これら2つの大学では、現在アルバイトに精を出しているグループの方が、時間的余裕ができても、これ以上アルバイトを促進したいと思っていないことになる。言い換えれば、この結果は、学費捻出などのためにそれだけ働かざるをえなく、本来ならもっと他の活動にも時間を割きたいと思っている学生が存在することを示唆しているとも考えられる。この点は、ファン・カルチャー志向派や「ボランティア」希望派のみならず、「学業」、「ダブルスクール」希望派の学生も、非希望派に比べてアルバイト時間数が長く、アルバイトが多少負担になっていると予想されることからも補強されるものと思われる。

これに対し、F大学では、「アルバイト希望派」の学生の、現時点でのアルバイト従事時間は10.1時間、「アルバイト非希望派」の学生のそれは8.3時間であった。つまり、この大学では、他の2大学とは反対に、現在アルバイトに熱中している学生は、よりアルバイト活動を促進したいと望んでいるのに対し、現在アルバイトにそれほど力を入れていない学生は、今後もアルバイトに精力を注ぎたいとは思っていない傾向がみられる[7]。また、「学業」、「ダブルスクール」希望派は非希望派に比べ、現在でもアルバイト従事時間が短い。つまり、アルバイトに投入する時間は、現在と同じく短時間に抑え、「学業」や「ダブルスクール」を促進したいと思っている学生グループが存在するとみなせる。F大学の学生は、(a)「勉学志向派」、(b)「ダブルスクール志向派」、(c)「サークル志向派」の学生に三極分化している可能性がある、と先に指摘した。のみならず、今回サンプルとした全大学に共通する傾向として、「サークル志向」と「アルバイト志向」は基本的には、同居しないことについても、前に指摘しておいた。こうしてみると、少なくともF大学の学生は、上に示した(a)～(c)のタイプに、(d)「アルバイト志向派」を加え、計4つのタイプの学生に分化しているものと思われる。

3．4. 平日、土曜日、日曜日の余裕度

われわれは、平日、土曜日、日曜日のそれぞれについて、時間的に「かなり」、「比較的」余裕があるか、「あまり」、「ほとんど」余裕がないかを4段階で評定してもらった。その結果として、時間的に「かなり」、「比較的」余裕があると応えた学生の比率を、平日、土曜日、日曜日に分けて大学別に示したものが、表3－4である。表をみるとまず、平日、土曜日、日曜日のいずれについても、30～55％の学生は余裕があると思っていることが分かる。

表3－4．平日、土曜日、日曜日ごとにみた時間的に余裕のある学生の比率

	平日	土曜日	日曜日
F大学	55.0%	54.5%	31.6%
J大学	33. 5%	48.4%	39.6%
T大学	49.7%	52.6%	45.2%

それでは、現在どのような活動を重視している学生が、どの曜日を比較的忙しいと考えているのだろうか。ここでもまず、表3－3などと同じ手順で、現在の各活動の重視度をもとに、学生を「○○重視派」と「○○非重視派」とに分け、それら2つのグループについて、各曜日別にどの程度忙しくしているかの平均値を算出し、各活動ごとにそれぞれ「重視派」と「非重視派」の忙しさの度合いを比較してみた。その結果、少数の例外は認められたものの、基本的にはどの活動をとっても、「重視派」の方が「非重視派」より、いずれかの曜日についてだけ、とくに忙しかったり、あるいは余裕があったりしているわけではなかった。つまり、特定の活動に打ち込んでいる学生集団（「重視派」）は、そうでないグループ（「非重視派」）に比べ、曜日にかかわらず、1週間をとおして忙しい毎日を送っているか、余裕ある毎日を送っているかのどちらかに分かれる傾向が存在することが分かった[8]。そこでここでは、平日、土曜日、日曜日の余裕度といった3つの変数を単純に足し込み、合成変数を作り、「1週間をとおしての忙しさ」とみなすことにした。各活動について「重視派」の方が「非重視派」より、「1週間をとおしての忙しさ」の平均値、つまり忙しさの度合いが高くでたものについては×を、余裕度が高かった項目については○をつけるという表示方法で、大学別にこの点を要約したものが、表3－5である。

表３－５．１週間をとおしての忙しさと現在重視している活動の大学別比較

	学業重視	読書重視	サークル重視	アルバイト重視	趣味重視	交友重視	異性重視	娯楽重視	ボランティア重視	ダブルスクール重視	家事重視	休養重視
F大学	×	○	×	×	○	○	○	○	×	×	○	○
J大学	○	○	×	×	○	○	×	○	×	×	×	○
T大学	○	○	×	×	○	○	○	○	×	○	○	○

表をみると、どのような活動を重視しているかによって、毎日の忙しさが、ほぼ色分けされていることが分かる。たとえば、「サークル」、「アルバイト」、「ボランティア」、「ダブルスクール」など、組織的な課外活動を重視している学生は、毎日忙しい様子がみてとれる。一方、「趣味」、「友人との交友」、「異性との交際」、「娯楽」、「休養」などのファン・カルチャー志向派、および「家事」、「読書」重視派は、基本的には毎日、比較的余裕ある生活を送っていることが分かる。これに対し、「学業」についてはここでも、Ｆ大学と他の２大学のあいだに違いがみられる。つまり、Ｊ大学やＴ大学の「学業重視派」は、比較的余裕ある毎日を過ごしているのに対し、Ｆ大学の「学業重視派」は、忙しい雰囲気に包まれている傾向がみられるからである。

それでは、現在の毎日の忙しさの度合いと、時間に余裕があれば促進したい活動との間には、何らかの関係がみられるのであろうか。この点を確かめるため、時間に余裕があれば、促進したい活動について、表３－５と同様の表を作成してみたものが、表３－６である。

表３－６．１週間をとおしての忙しさと時間があれば促進したい活動の大学別比較

	学業希望	読書希望	サークル希望	アルバイト希望	趣味希望	交友希望	異性活動希望	娯楽希望	ボランティア希望	ダブルスクール希望	家事希望	休養希望
F大学	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×
J大学	○	○	×	○	○	×	×	×	×	○	×	×
T大学	○	○	×	○	×	×	○	○	×	×	○	×

まず、比較的忙しい毎日を送っている学生が、「休養」を求めたり、「サークル」、「ボランティア」、「ダブルスクール」に加え、「友人との交友」、「異性との交際」、「家事」のいずれかの活動にもっと時間を割きたいと感じている傾向があることが分かる。つまり、現在の生活が忙しすぎて、これら活動にもっと時間を費やしたいにもかかわらず、それができない学生がいることになる。とくに「休養」に着目すれば、学生たちのなかには、日々の生活に追われ、疲れ果てているグループが存在するものと推測される。

一方、毎日、比較的余裕ある生活を送っている学生についてみると、今回サンプルとした３つの大学にほぼ共通して観察される傾向として、彼らは「趣味」や「娯楽」に、もっと時間を振り向けたいと感じていることが分かる。また、Ｊ大学とＴ大学では、それら余裕派の学生が、「学業」や「読書」、および「アルバイト」にもっと時間を振り向けたいと感じている傾向がみられる。しかし、「学業」、「読書」、「アルバイト」、「趣味」、「娯楽」は、時間的余裕さえあれば、自分でどれだけでも増進していくことのできるタイプの活動だと思われる。にもかかわらず、現在、比較的余裕ある生活を送っている学生が、これら活動に時間を振り向けたいと思っていた。本当はもっと勉強しなければいけない、あるいはもっとアルバイトや読書、趣味に時間を費やしたいと思っているのに、日々楽しいことに流されてしまったり、もっと積極的に有意義な娯楽に取り組みたいのに、ついつい無為に過ごしてしまう自分への嫌悪感の現れの表現とも考えられるが、今のところは何ともいえない。

これに対し、Ｆ大学では、現在忙しくしている学生の方が、「学業」、「読書」、「アルバイト」を、もっと促進したいと希望していた。Ｆ大学の学生は、(a)「勉学志向派」、(b)「ダブルスクール志向派」、(c)「サークル志向派」、(d)「アルバイト志向派」の、４つのタイプの集団に分類できる可能性が高いことについては、前に指摘しておい

た。さらに、たとえば「サークル志向派」は、現在もサークル活動に、かなりの時間を投入していながら、もっとその活動に特化したいと希望していることについても、先に触れておいた。「ダブルスクール志向派」のみならず、とくにF大学では「アルバイト志向派」についても、同様である。かりに、それらの活動志向派と同じ傾向が「勉学志向派」にも当てはまると仮定するなら、「学業」や「読書」に相当な時間を投入して、忙しい日々を送っているのみならず、もっと勉学に集中したいと考えている学生集団が、この大学には確かに存在することを示しているものと思われる。

3．5．本章のまとめ

本章では、学生たちが現在重視している活動と、時間的余裕があれば促進したい活動を中心に、実際の生活時間の配分の仕方、毎日の余裕度などとの関係をみてきた。このテーマは、次章でも別の角度から分析が深められることになるので、ここでは簡単なまとめだけ行っておこう。

(1) 一般的に学生たちの自由時間のなかで、もっとも投入時間数が長かったのはアルバイトであった。たとえば、今回のサンプル全体の平均値をもとにすれば、学生たちはアルバイトに、週当たり 11.5 時間の時間を投入している。そして、どのような活動を重視する学生たちも、その活動につぎ込む時間と同程度以上の時間をアルバイトに投入していた。この意味で、それに費やす時間の長さからいっても、学生にとってアルバイトは、大学での正規の授業につぐ、大がかりな日常的活動になっていることは明らかである。こうしてみると、学生の自由時間問題の大半は、アルバイト問題に集約されるといっても、過言ではないと思われる。

(2) 「趣味」、「友人との交友」、「異性との交際」、「娯楽」、「休養」などのファン・カルチャー志向派、および「家事」、「読書」重視派は、基本的には平日、土曜日、日曜日をとおして、比較的余裕ある生活を送っている可能性が高い。一方、「サークル」、「アルバイト」、「ボランティア」、「ダブルスクール」など、組織的な課外活動を重視している学生は、毎日多忙な生活を送っていると感じていた。

(3) しかし、「学業」、「読書」、「サークル」、「異性との交際」、「ボランティア」、「趣味」、「友人との交友」、「娯楽」、「家事」、「ダブルスクール」、「休養」の 11 活動については、現在重視していない活動よりは、現在重視している活動を、時間的余裕があれば今以上に促進したいと考えている傾向があった。つまり、多くの活動については、現在重視している活動でさえ、時間的に十分な活動展開ができていないと思っている学生が多いことになる。

(4) 最後に、大学別にみた場合には、基本的には、J大学およびT大学の2大学に比べて、F大学では随分、雰囲気が異なることが分かった。まず、F大学では、「学業」重視・希望派と「読書」重視・希望派に加えて、「ダブルスクール」重視・希望派の比率がわめて高く、しかも「趣味」、「娯楽」、「休養」重視・希望派、つまりファン・カルチャー志向派が、他の2大学に比べ圧倒的に少ない。のみならず、J大学とT大学では、課外活動などにあまり時間を割かず、毎日、比較的余裕のある学生の方が、もっと勉学（「学業」や「読書」）に力を注がなければならないと考えていたのに対し、F大学では、現在も忙しいと思うほど、勉学にかなりの時間をかけていると推測される学生の方が、もっと勉強に特化したいと考えていた。なお、以上の相違が、入学難易度の高さだけで説明できるのかどうかは、今後の課題にしたい。

注）

1) 岩田弘三・北條英勝・黒河内利臣「生活時間調査をもとにみた武蔵野女子大学生の生活と意識」、『武蔵野女子大学 現代社会学部紀要』第2号、2001年。

2) なお、これら項目のうち7つについては、第1章の注1)に示した研究でも、19大学を対象として 1997 年に、ほぼ同じ調査を行っている。それと比べると今回の調査では、「ダブルスクール」（前回調査の比率は 4.4%、

以下同様）の重視度が低く、「サークル」（27.8%）の重視度にほとんど差がないことを除けば、「友人との交遊」（66.7%）、「学業・勉強」（47.7%）、「趣味」（45.9%）、「アルバイト」（43.9%）、「異性との交際」（32.6%）、いずれの項目についても重視度がかなり高くなっている。1997年調査では、それぞれの活動を「非常に」、「やや」重視している、「あまり」、「ほとんど」重視していない、といった順序に並べて選択肢を作っていたが、今回の調査ではその4段階評価の順序を逆にした。おそらくそれが、今回の調査と1997年調査とで回答傾向が異なった最大の原因と予想される。

3) 前掲、岩田・北條・黒河内、2001年。

4) これら3大学の平均アルバイト時間をみると、J大学やT大学に比べて、F大学の短さが際立っている。この結果については、以下のような見方もできる。たとえば、われわれが1997年に19大学を対象として行った調査では、F大学を含めて、入学難易度が高い大学ほど、親の学歴が高い傾向がはっきりみてとれる（第1章の注1）の①の文献参照）。このことは、入学難易度が高い大学ほど、比較的、所得の高い階層出身者が多いとの指摘を、間接的に裏付けているものと思われる。こうしてみると、F大学の学生の平均アルバイト時間の短さは、今回調査対象とした他の2大学より、アルバイトにあまり頼らなくても、両親からの十分な援助だけで、余裕ある学生生活を謳歌できるがゆえに、アルバイトにそれほど執着する必要のない学生が多いことを示唆している可能性もある。

また、入学難易度が高い大学に通う学生ほど、時給などの面で効率のよいアルバイトにありつける可能性が高いと考えられる。それが正しいとすれば、同一期間に一定額のアルバイト収入を必要とする場合でも、F大学の学生たちは短いアルバイト時間で、目標を達成できることになる。そういった事情も、F大学の学生の平均アルバイト時間の短さを説明する要因の一つになる可能性もある。

5) なお表は割愛するが、現在重視している活動、および時間的余裕があれば促進したい活動として、それぞれ今回取り上げた12項目については、ほとんど無相関な状態にあったことを付記しておく。

6) ただし、大学別にみた場合には、J大学でいくつかの例外が認められる。この大学の「異性との交際」および「家事」希望派の学生はともに、非希望派の学生に比べ、週当たりでみれば、大学での正規の授業を1コマ分多く受講しているのみならず、エクステンション、専門学校、サークル、ボランティアの4活動に費やしている時間の総計は、1.6時間多いという傾向がみられる。

7) 先に注4)で指摘したように、F大学では今回調査対象とした他の2大学より、両親からの十分な援助を期待できるがゆえに、アルバイトにそれほど執着する必要のない学生が多いのみならず、時給などの面で効率のよいアルバイトにありつける可能性が高いと考えられる。これらの事情が原因となって、F大学には、今程度の短いアルバイト時間で満足している学生が、多数存在している可能性もある。

8) 各曜日ごとの集計結果は、今回サンプルとした大学の1つを例にとってすでに紹介してあるので、そちらを参照されたい（前掲、岩田・北條・黒河内、2001年）。

（岩田　弘三）

4．生活時間と活動とに関する学生の主観的側面の分析

2章で検討したように、学生が諸々の活動に費やす客観的時間は、大学での授業時間数の多寡を前提に構成されているが、その一方で、授業以外の時間でどのような活動を行うのかは決して一律ではなく、サークル活動、友人との交遊、デート、アルバイト、読書など、様々なバリエーションが存在している。こうした、学生の生活

時間と活動の多様性の背後には、客観的な時間のみならず、時間感覚や時間意識、志向性などの主観的次元が潜んでいると考えられる。

そこで、この章では、客観的な物理的時間から学生の諸活動の実態を検討するのではなく、大学生が現在行なっている諸活動の中で、どのような活動を最も重視しているのか、時間的にどの程度忙しいと感じているのか、そして、今後、どのような活動に自分の生活時間を最も振り向けたいと考えているのかといった、時間と活動とに関する学生の主観的意識・感覚をふまえた上で、学生生活における諸活動を考察する。但し、この論点の多くは、既に3章で詳しく分析しているので、ここでは若干違った角度から3章の分析を裏付けるとともに、補足することをねらいとしたい。

4．1．最も重視している活動と時間的余裕感覚

まず、分析の開始点として、学生たちが、一体どのような活動を最も重視して、日常的に学生生活を営んでいるのか、ということを確認しておこう。これに関して、今回のアンケート調査では、2種類の質問を行っている。一つは、「学業」、「読書」、「クラブ・サークル活動」、「アルバイト」、「趣味」、といった 12 の活動分野のそれぞれに関して4段階で重要度を評定してもらう質問で、もう一つは、この12分野に「その他」を付け加えた13分野のうちで、「現在最も重視している活動は何か」を聞く質問である。3章の分析は前者を用いているので、ここでは後者を用いて分析してみよう。この結果を大学別に示したものが表4-1である。これを見ると、サンプル全体では、比率が高い活動から順に、「交友」の 17.9%、次いで、「学業」が 16.7%、以下、「異性の友人（恋人）とのデート」が 13.1%、「趣味」12.6%、「アルバイト」10.9%、「クラブ・サークル活動」10.6%、「休養」8.8%（以下省略）となっている。他方、「読書」、「娯楽」、「ボランティア」、「専門学校での学習（ダブルスクール）」や「家事」といった諸活動は、それぞれ 4%以下の比率に過ぎず、これらの活動を最も重視している学生は非常に少ないことがうかがえる（したがって、これらの活動に関しては、顕著な特徴が見出されない限り、言及しないこととする）。

しかしながら、こうした傾向は、あくまでもサンプル全体の傾向であり、大学別に見た場合には、かなりの差異が存在しているのも事実である。例えば、T大学では、サンプル全体と同様に「交友」を最重視する学生の比率が最も高いとともに、「学業」を最も重視している学生の比率がそれに次いで高くなっているが、「異性の友人（恋人）とのデート」や「趣味」を挙げた者の比率はそれほど高くはなく、代わりに、「アルバイト」と「クラブ・サークル活動」の比率が高くなっている。F大学では、「学業」を最重視する学生の比率が際立って高く、次が「異性の友人（恋人）とのデート」であり、それに対して「趣味」と「アルバイト」を最も重視するという学生の比率は非常にわずかな値に止まっている。そして、J大学は、最も比率が高いのが「趣味」であり、「学業」を最重視する学生の比率は他の2大学と比べて明らかに低くなっているのである。これら、大学別の特徴は、3章の分析結果と多少食い違っているが、この微妙な違いの中に、「現在重視している活動」と「最も重視している活動」との意味内容の違いが存していると考えられよう。いずれにせよ、大学別に見た場合、どの活動を最も重視しているかには、大学間でかなりの差異があるのであり、所属する大学毎に学生層の志向性が大きく相違していることが示唆される。

表４－１．大学別最重視活動

		大学名			合計
		T大学	F大学	J大学	
学業	度数(人)	23	28	15	66
	比率(%)	15.1	28.6	10.3	16.7
読書	度数(人)	2	4	10	16
	比率(%)	1.3	4.1	6.8	4.0
クラブ・サークル	度数(人)	20	14	8	42
	比率(%)	13.2	14.3	5.5	10.6
アルバイト	度数(人)	22	4	17	43
	比率(%)	14.5	4.1	11.6	10.9
趣味	度数(人)	15	6	29	50
	比率(%)	9.9	6.1	19.9	12.6
交友	度数(人)	30	14	27	71
	比率(%)	19.7	14.3	18.5	17.9
異性(デート)	度数(人)	13	15	24	52
	比率(%)	8.6	15.3	16.4	13.1
娯楽	度数(人)	3	2	3	8
	比率(%)	2.0	2.0	2.1	2.0
ボランティア	度数(人)	3	0	0	3
	比率(%)	2.0	0.0	0.0	0.8
ダブルスクール	度数(人)	1	3	0	4
	比率(%)	0.7	3.1	0.0	1.0
家事	度数(人)	3	0	0	3
	比率(%)	2.0	0.0	0.0	0.8
休養	度数(人)	15	7	0	35
	比率(%)	9.9	7.1	8.9	8.8
その他	度数(人)	2	1	0	3
	比率(%)	1.3	1.0	0.0	0.8
全体	度数(人)	152	98	146	396
	比率(%)	100.0	100.0	100.0	100.0

それでは、このように、多様な学生たちは、日常生活の中で、どの程度「時間的余裕がある」、あるいは、「忙しい」と感じているのだろうか。平日のデータを中心に検討しておこう。表 4-2 は、最も重視する活動別に、平日の時間的余裕感覚の程度を、「時間的余裕がある」と「時間的余裕がない」の２つの値で示したものである。これを見ると、学生サンプル全体では、「時間的余裕がある」と感じている者が 54.5%、「余裕がない」と感じている者が 45.5%という比率が得られた。この比率を基準にすると、「交友」活動を最も重視している学生では、「時間的余裕がない」と感じている者と「時間的に余裕がある」と回答した者との比率は、全体傾向とほぼ同一であるが、それに対して、「学業」や「クラブ・サークル活動」、「アルバイト」を最も重視する学生では、「時間的余裕のなさ」を訴える割合が相対的に高くなっているのが分かる。こうした学生層では、少なくとも主観的には、多忙な日常生活を送っている者の割合が多いのである。このことから、学生の本分である「学業」、そして、組織的な課外活動である「クラブ・サークル」や「アルバイト」といった活動が、学生の主観的時間感覚に対して、いかに大きな影響力をもっているのかが理解できよう。

表４－２．最重視活動 と 平日の時間的余裕感覚

		時間的余裕がない	時間的余裕がある	合計
学業	度数(人)	35	29	64
	比率(%)	54.7	45.3	100.0
読書	度数(人)	3	12	15
	比率(%)	20.0	80.0	100.0
クラブ・サークル	度数(人)	24	18	42
	比率(%)	57.1	42.9	100.0
アルバイト	度数(人)	26	17	43
	比率(%)	60.5	39.5	100.0
趣味	度数(人)	12	36	48
	比率(%)	25.0	75.0	100.0
交友	度数(人)	34	36	70
	比率(%)	48.6	51.4	100.0
異性(デート)	度数(人)	22	30	52
	比率(%)	42.3	57.7	100.0
娯楽	度数(人)	1	7	8
	比率(%)	12.5	87.5	100.0
ボランティア	度数(人)	1	1	2
	比率(%)	50.0	50.0	100.0
ダブルスクール	度数(人)	2	2	4
	比率(%)	50.0	50.0	100.0
家事	度数(人)	0	3	3
	比率(%)	0.0	100.0	100.0
休養	度数(人)	15	20	35
	比率(%)	42.9	57.1	100.0
その他	度数(人)	2	1	3
	比率(%)	66.7	33.3	100.0
全体	度数(人)	177	212	389
	比率(%)	45.5	54.5	100.0

また、これとは逆の顕著な特徴として、「読書」、「趣味」、「異性とのデート」、「休養」といった活動を最も重視する学生層では、「時間的余裕がある」と感じている者の割合が明らかに高くなっており、とりわけ、「読書」を最重視する学生においては、(サンプル数が少ないとはいえ) 実にその 80%が、そして、「趣味」を最重視する学生でも、その 75%が「時間的に余裕がある」と回答していることが挙げられる。つまり、「読書」やこれらのファン・カルチャー的な諸活動を重視する学生層は、主観的時間感覚においては、かなり余裕のある日常生活を送っているのである。

４．２．今後最も希望する活動と時間的余裕感覚

次に、仮に現在の生活の中で時間的に余裕ができた場合、学生たちは、どのような活動に自分の時間を最も割り振りたいと希望しているか、検討しておこう。表 4-3 は、学生たちが最も時間を振り向けたいと希望する活動の種類毎に学生の比率を示したものである。

表４－３．大学別最希望活動

		大学名			合計
		T大学	F大学	J大学	
学業	度数(人)	17	25	14	56
	比率(%)	11.2	25.5	9.8	14.2
読書	度数(人)	12	14	21	47
	比率(%)	7.9	14.3	14.7	12.0
クラブ	度数(人)	5	1	8	14
	比率(%)	3.3	1.0	5.6	3.6
アルバイト	度数(人)	17	2	11	30
	比率(%)	11.2	2.0	7.7	7.6
趣味	度数(人)	21	8	17	46
	比率(%)	13.8	8.2	11.9	11.7
交友	度数(人)	30	12	23	65
	比率(%)	19.7	12.2	16.1	16.5
異性(デート)	度数(人)	6	9	15	30
	比率(%)	3.9	9.2	10.5	7.6
娯楽	度数(人)	3	3	2	8
	比率(%)	2.0	3.1	1.4	2.0
ボランティア活動	度数(人)	4	1	3	8
	比率(%)	2.6	1.0	2.1	2.0
ダブルスクール	度数(人)	4	6	11	21
	比率(%)	2.6	6.1	7.7	5.3
家事	度数(人)	1	1	0	2
	比率(%)	0.7	1.0	0.0	0.5
休養	度数(人)	30	15	18	63
	比率(%)	19.7	15.3	12.6	16.0
その他	度数(人)	2	1	0	3
	比率(%)	1.3	1.0	0.0	0.8
全体	度数(人)	152	98	143	393
	比率(%)	100.0	100.0	100.0	100.0

学生サンプル全体で見た場合に、最も学生の比率が高かったのは、「交友」の 16.5%と「休養」の 16.0%であり、以下、「学業」の 14.2%、「読書」の 12.0%、「趣味」の 11.7%、がそれに続いている。興味深いのは、前節で検討した「学生が最も重視する活動」においては比較的高い比率を示していた「異性とのデート」や「アルバイト」の比率が低くなっているだけでなく、「クラブ・サークル活動」が 3.6%と極めて低い値に止まっていることであろう。それらに代わって、「読書」や「趣味」、「ダブルスクール」などの諸活動は目に見えて比率が高くなっているのが分る。それ故、全体的に言えば、様々な活動分野に学生の関心・志向が分散しているように見えるのである。しかし、ここで最も顕著な特徴だと考えられるのは、「休養」に最も時間を割きたいと考える学生の割合がかなりの高率に達していることである。既に前節で述べたように、「学業」、「クラブ・サークル活動」と「アルバイト」を最重視する学生以外は、とりたてて多忙であるとも考えられない。にもかかわらず、「休養」を望む学生は、今後最も時間を割り振りたい活動のうち、実に２番目に高い比率に達しているのである。

また、大学別に見ても、「最も重視している活動」の場合と異なり、大学間の差異は小さくなっていることが確認できるが、これは学生の関心や志向が様々な活動分野に分散していることが原因であろう。とは言え、勿論、

大学による差異が全く存在しないわけではない。例えば、T大学では「交友」と「休養」、そして「趣味」や「アルバイト」を希望する学生の比率が相対的に高く、「学業」希望や「ダブルスクール」希望者の比率が他大学と比べて低くなっているし、J大学では「交友」や「読書」、「休養」などが高い比率であるのに対して、「学業」を最も希望する者の割合は相対的に低い水準に抑え込まれている。これとは反対に、F大学では、「学業」を最も希望する学生の割合が非常に高いが、「アルバイト」や「クラブ・サークル活動」希望者の割合は非常に低くなっているのである。このような違いはあると言っても、全ての大学で「休養」を最も希望する学生が相対的に高い比率に達している点は、やはり大変興味深い現象であると言えよう。

それでは、この「休養」に最も時間を費やしたいと考えている学生たちは、日常生活の中で、実際、どの程度忙しいと感じているのだろうか。この問題の一端は、最も時間を割きたい活動毎の時間的余裕感覚を表現した表4-4から読み取れよう。これを見ると、「読書」と「アルバイト」に、今後最も時間を割きたいという学生層では、サンプル全体の比率と比べて明らかに「時間的に余裕がある」と感じている者の割合が高くなっているのに対して、「異性とのデート」を希望する学生層と「休養」を希望する学生層では、その反対に、「時間的に余裕がない」と回答する者の方が明らかに高率になっていることが読み取れる。つまり、「読書」や「アルバイト」を希望する学生の多くは、時間的に余裕があるからこそ、そうした活動に最も時間を費やすことを望んでいるのだと考えられるのであるが、それに対して、「異性とのデート」を希望する学生の多くは、現在忙しいために自分の希望が叶えられないため、そして、「休養」を望む学生の多くは日常的に時間的余裕のなさを感じており、そのために「時間があれば休みたい」と考えている姿が思い浮かぶのである。

この問題は、勉学意欲をはじめとする活動への意欲や活動姿勢、そして、活動をすることによる疲労の問題と関連する重要な論点だと考えられるので、別の角度からも検討しておきたい。すなわち、日常的に余裕がないと感じている学生のうち、どのくらいの割合が「休養」したいと考えているのか、ということである。表4-5は、平日の時間的余裕感覚別に、「休養」に最も時間を割り当てたい学生の比率を示した表であるが、これを見ると、時間的余裕が最も少ないと感じている43名の学生のうち実に25.6%が、そして、「あまり時間的余裕がない」と回答した134名の学生の21.6%が「休養」を望んでいることが分る。このように、「休養」を希望する割合は、極めて明瞭に「時間的余裕感覚」と相関している。つまり、全体的に見て、時間的に余裕がないと感じているほど、「休養」を望む割合が増加するのである。したがって、「時間的に余裕がない」と感じている学生は、日常的な忙しさから逃れるために「休養」を志向するのだと考えられる。

表４－４．最希望活動と平日の時間的余裕感覚

		時間的余裕がない	時間的余裕がある	合計
学業	度数(人)	23	31	54
	比率(%)	42.6	57.4	100.0
読書	度数(人)	15	31	46
	比率(%)	32.6	67.4	100.0
クラブ・サークル	度数(人)	6	8	14
	比率(%)	42.9	57.1	100.0
アルバイト	度数(人)	8	22	30
	比率(%)	26.7	73.3	100.0
趣味	度数(人)	21	24	45
	比率(%)	46.7	53.3	100.0
交友	度数(人)	26	37	63
	比率(%)	41.3	58.7	100.0
異性(デート)	度数(人)	18	12	30
	比率(%)	60.0	40.0	100.0
娯楽	度数(人)	4	4	8
	比率(%)	50.0	50.0	100.0
ボランティア活動	度数(人)	4	4	8
	比率(%)	50.0	50.0	100.0
ダブルスクール	度数(人)	9	12	21
	比率(%)	42.9	57.1	100.0
家事	度数(人)	1	1	2
	比率(%)	50.0	50.0	100.0
休養	度数(人)	40	22	62
	比率(%)	64.5	35.5	100.0
その他	度数(人)	2	1	3
	比率(%)	66.7	33.3	100.0
合計	度数(人)	177	209	386
	比率(%)	45.9	54.1	100.0

表４－５．平日の時間的余裕感覚別「休養」希望学生の比率

		余裕がほとんどない	あまり余裕がない	比較的余裕がある	かなり余裕がある	合計
休養	度数(人)	11	29	19	3	62
	比率(%)	25.6	21.6	12.8	4.9	16.1
全体	度数(人)	43	134	148	61	386
	比率(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

４．３．最も重視する活動と今後最も重視したい活動との関係

ここまでの分析を通じて様々な点が明らかになったが、最後に、次の点を分析しておきたい。すなわち、現在最も重視している活動の種類と、今後最も時間を割きたい活動との間にはいかなる関係があるのか、という問題である。

表 4-6 は、現在最も重視している活動毎に、今後最も時間を割きたい活動の種類を比率のみ集計した結果である。ここでの全体的な特徴は、仮に時間があったとしても、現在最も重視しているものと全く同じ活動に、その時間を割り当てたいと考える「持続傾向」が強いことである。つまり、現在最も重視する活動を更に促進したいと考える学生が多数存在するということである。この傾向は、例えば、「読書」を最も重視する学生層での 62.5%を筆頭に、「趣味」最重視の学生層の 39.6%、「交友」を最も重視する学生で 38.2%、「休養」を最重視する学生で 31.4%、「学業」重視の学生で 30.3%などとなっているのをはじめとして、今後時間を割こうとする場合に他の活動分野に分散する傾向のある「クラブ・サークル活動」最重視層でも、19.0%の学生が選択していることからも明らかだろう（表 4-6 では、サンプル数が少ないものを除き、この「持続傾向」の部分に網掛けを施している)。このように、現在最も重視している活動を今後時間ができた場合にもそのまま持続していこうとする傾向は、とりわけ「読書」と「趣味」、そして「交友」を重視する学生に顕著であるが、こうした傾向を示す学生たちにとって、それ以外の諸活動はあまり魅力の無いものとして捉えられていると考えられよう。

表４－６．最重視活動と最希望活動との関係（単位：%）

		最希望活動													
		学業	読書	クラブ	アルバイト	趣味	交友	異性(デート)	娯楽	ボランティア活動	ダブルスクール	家事	休養	その他	合計
最重視活動	学業	30.3	10.6	3.0	9.1	6.1	13.6	4.5	0.0	3.0	3.0	0.0	16.7	0.0	100.0
	読書	12.5	62.5	0.0	6.3	0.0	12.5	0.0	0.0	0.0	6.3	0.0	0.0	0.0	100.0
	クラブ・サークル	9.5	21.4	19.0	7.1	7.1	11.9	0.0	0.0	0.0	4.8	0.0	19.0	0.0	100.0
	アルバイト	9.5	7.1	0.0	7.1	19.0	14.3	14.3	4.8	7.1	2.4	0.0	14.3	0.0	100.0
	趣味	12.5	6.3	0.0	12.5	39.6	8.3	0.0	2.1	0.0	8.3	0.0	8.3	2.1	100.0
	交友	8.8	2.9	4.4	4.4	2.9	38.2	7.4	1.5	2.9	4.4	0.0	20.6	1.5	100.0
	異性(デート)	15.4	5.8	0.0	3.8	9.6	5.8	26.9	3.8	1.9	9.6	1.9	15.4	0.0	100.0
	娯楽	0.0	28.6	0.0	0.0	28.6	14.3	0.0	28.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	ボランティア	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0	66.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	ダブルスクール	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	家事	0.0	33.3	0.0	33.3	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	休養	14.3	11.4	2.9	11.4	8.6	11.4	2.9	0.0	0.0	0.0	2.9	31.4	2.9	100.0
	その他	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0	100.0
全体		14.1	12.1	3.6	7.5	11.8	16.5	7.7	2.1	2.1	5.4	0.5	15.9	0.8	100.0

この点に関連して言えば、「学業」を重視する学生グループが、今後も「学業」に時間を割きたいと考える割合が比較的高いことは、言わば「朗報」であるが、それとともに「休養」や「交友」に時間を割きたいという比率が比較的高いことも決して忘れてはならないだろう。

この表から読み取れるもう一つの顕著な特徴は、「異性とのデート」、「アルバイト」、「休養・くつろぎ」、「クラブ・サークル活動」を最も重視する学生層において、今後最も時間を割きたい活動として「休養」がかなり高い割合で選択されていることである。このうち、「休養」最重視の学生が今後も「休養」に時間を割きたいと考えがちなのは、既に述べた「持続傾向」であると考えられるが、それ以外の学生層が「休養」志向を示していることは無視できない事実である。これまでの全ての分析から考えると、これらの「休養」志向学生の多くは、現在重

視している活動のために、休養を欲するほど日常的に時間的余裕が無くなっているのだと考えられるよう。

以上のように、今回の学生サンプルの両極には、一方で、「趣味」や「友人との交友」を現在だけでなく今後も重視したいと考えるグループや、決して時間的余裕を無くしてまでも積極的な活動を行なうわけではないグループとともに、他方では、「クラブ・サークル活動」や「アルバイト」に追われて時間的な余裕が無くなり、「休養」を必要とするグループがある。この両者の中間には、「学業」や「読書」を志向する学生層があるが、彼らも「アルバイト」や「休養」の間で、そして、「趣味」や「交友」の間で揺れており、必ずしもその志向性が強固とは考えられないのである。

（北條 英勝）

付記：本論は、平成 11～14 年度　文部省科学研究費補助金（基盤研究(C)）「卒業生の視点からみたカレッジインパクトと大学評価に関する研究」（研究代表者：岩田弘三）の研究成果の一部をなす。

How Do Japanese Universities Students Spend A day?

IWATA, Kozo (Associate Professor, Musashino Women's University)
HOJYO, Hidekatsu (Lecturer, Musashino Women's University)
HAMAJIMA, Koji (Graduate Student of Sophia University)

The purpose of this paper is to clarify the true nature of "Student Culture" in Japanese Universities showing how Japanese universities students spend a day. Although we have succeeded in extracting some types of the student culture by a method of opinion survey, but not a fact survey, before, there were some problems emerging. Especially, the more visibly we extracted the differentiation of student culture, more invisibly we could describe common student culture that all students shared with. For example, even if there are such two type student as academic-oriented students and fun culture-oriented students extracted in many student culture studies, the difference of them is only relative one, since it is obvious that fun culture-oriented students as well as academic-oriented ones spend more time to study in college class than to use amusement. Therefore, at this time we surveyed how students spend a day, because it is possible that this type of survey seems a kind of fact survey, and gives us absolute indicators when we try to investigate the student culture. In this study we can clarify some fact including a trend that the side job is one of common student culture which most students share with as they engage in a side job for long hours to earn their pocket money.